

批評と紹介

ヨーロッパにある満洲語文献について

池上 二良

満洲語文献解題には諸学者の手になるものがふるくから種々あるが、従来もつとも多くの満洲語文献をのせている李徳啓氏の「国立北平図書館故宮博物院図書館満洲文書聯合目録」が一九三三年に出版され、一方そのころフックス (W. Fuchs) 教授のこの著書、論文が発表された。

Neues Material zur mandjurischen Literatur aus Pekingener Bibliotheken (Asia Major, VII, 1931)

Beiträge zur mandjurischen Bibliographie und Literatur. Tokyo, 1936. (=EMBL)

Neue Beiträge zur mandjurischen Bibliographie und Literatur (Monumenta Serica, VII, 1942) (=NBMBL)

満洲語の文献の書誌学的研究は、フックス教授のこれらの著述によつて非常にすすんだといふことができよう。

ヨーロッパにのこる満洲語文献については、コアヴァッチ (W. Kowicz) の Sur le besoin d'une bibliographie complète

批評と紹介 池上

de la littérature mandchoue (Rocznik Orientalistyczny, V, 1928) にも知られてゐるが、筆者は昭和三五年から三六年にかけてドイツ、デンマーク、イギリス、フランスにおいて主としてこの図書館にある満洲語文献につき、ごく簡単に目をとおして所在をたしかめることができた。⁽¹⁾

1 東ムルンドイツ国立図書館 Deutsche Staatsbibliothek

版本一九部、写本二部(あわせて三一部)、版刷り文書一点、手書き文書一点。

2 マルブルグ西ドイツ図書館 Westdeutsche Bibliothek P. G. von Möllendorff 旧蔵の版本二三部、写本七部(あ

わせて三〇部)、手書き文書一点。ほかに版本一九部、写本二部(あわせて二一部)。このほか E. Haenisch 教授旧蔵

の版本二六部、写本四部(あわせて三〇部)。

3 テュービンゲン大学図書館 Universitätsbibliothek Tübingen P. G. von Möllendorff 旧蔵の版本五部、写本一部(あわ

せて六部)。ほかに写本一部、手書き文書一点。

4 西ムルン自由大学東アムン研究寮 Freie Universität Berlin, Ostasiatisches Seminar 版本二四部、写本八部(あわせて三二部)。

5 コペンハーゲン王室図書館 Det Kongelige Bibliotek 版本四八部、写本二部(あわせて六九部)、手書き文書三

点。

6 ロンドン大英博物館 British Museum

版本一六四部、写本二五部（あわせて一七九部）、版刷り文書二点、手書き文書（詰命）四点、書蹟一点。

7 ケンブリッジ大学図書館 University Library Cambridge

T. F. Wade 蒐集の版本八三部、写本二二部（あわせて九五部）。ほかに版本八部、写本一部（あわせて一〇部）。

8 パリ国立図書館 Bibliothèque Nationale

版本一九部、写本一四部（あわせて三三部）。

なおここに記した数は筆者がそでみた満洲語文献の数である。すくなくとも1から6までにおいてはそれぞれそこにある満洲語文献の大部分をみたとおもわれるが、各図書館のすべての満洲語文献に目をとおすということはむずかしく、たとえばベルリン国立図書館を前年八月たずね、書庫で三槐堂刊の繙訳四書 *Manju ubaiyambure duin bite* が漢籍にまじつてあるのを見たが、翌年ふたび行つたときにはついに借出すことができずくわしくみられなかつた。パリ国立図書館において筆者のみたのは、閲覧冊数の制限と滞在期間がみじかかつたため、わずかに全体の五分の一ぐらいのようである。

筆者のみたこれらの満洲語文献の目録の発表はいつかまたのおりにすることにして、ここにはみてきたところの一端をのべ、あわせて女真語の文献についての報告をおわりにつけ加えたい。

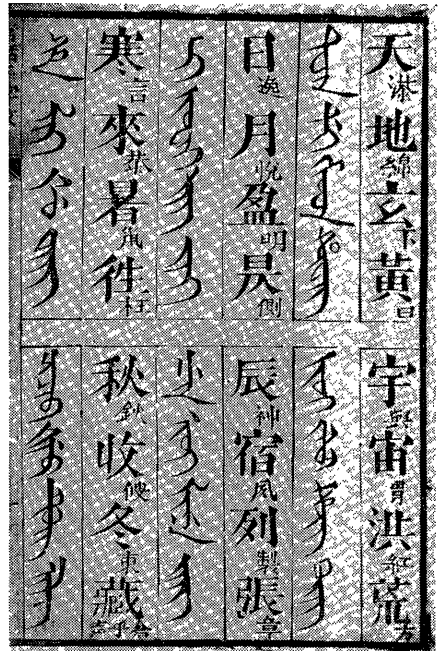
二

まずこれまでひろく知られてはいないとみられる版本をあげる

と、
満漢千字文 *Man han c'yan dz wen* 一冊。大英博物館蔵。
二一丁。第二丁のわくはたて 17.9 cm, よう 12.1+11.8 cm 各一丁六行、二段。表紙のまんなかに二行、左に上記満漢書名、右に上記漢文書名があり、その右に一行、京都壺壁齋行、書名の左に一行、福賢堂とある。第一丁からはじまる本文は、千字文の漢文の行とそのシナ語音を満洲字で記した行が交互にならび、千字文のおおの漢字の下には大抵漢字がもう一つずつ小さく記されている。なおさらに平声、上声、去声または入声と記されたものもある。これらの漢字は、現代北京音で上の漢字と同音のものが多いが、音をことにするものがあり、漢字音をあらわす満洲字とともにシナ語の研究資料とならう。この書の版にきざまれた満洲字の字形は普通の版本にみられるようなところのつた字形ではなく、たとえば *aleph* と *yod* とが区別しがたいものもある。はしらに官話千字文とある。おくがきに「沈啓亮諒舒 *sun ki h'yang sun* 広城同文堂梓」とある。ここに同文堂とあるのが初版の発行所であらう。

この沈啓亮は康熙二十二年の序をもつ満漢辞典「大清全書」をあらわした沈啓亮とおなじだろうから、この「満漢千字文」もおそらく康熙年間の刊行であらう。

満洲語に訳した千字文、または満洲字で書きあらわした千字文



満漢千字文第1丁おもて (British Museum 蔵)

はこのほかにも知られている。たとえばわが国江戸時代に比較的
はやくから知られた満洲字、満洲語に関する文献の一つである
「清書千字文」については、すでに内藤虎次郎博士、新村出博士
によつてのべられている。この「清書千字文」は千字文の漢字音
を満洲字で書きあらわしただけのものであるが、今日内閣文庫に
その三本(いずれも六丁)がある。そのうち二丁はそれぞれぎ
の二書についている。

千字文註(巻頭書名) 版本 一冊。本文はじめに「汪嘯尹先生纂
輯 武林孫呂吉謙益氏參註 同学袁士宗公望氏攷訂 仁和寮汪琮
潤章父較正」とある。

批評と紹介 池上

千字文註(巻頭書名) 版本 一冊。本文はじめにまえの書と同じ
上記記載があるが、ただし「同学……攷訂」の部分に欠く。おく
づけに「正徳五乙未年正月吉日 書肆 江戸日本橋南老丁目須原
屋茂兵衛 大坂安堂寺町心齋橋大野木市兵衛」とある。
もう一つはつぎの一本である。

清書千字文(巻頭) 写本 一冊。「求己文庫」などの印あり。
「満漢千字文」を「清書千字文」(一番目にあげた書による)
とくらべてみると、満洲字による漢字音のうつし方は両者ことな
る点がある。たとえば、「満漢千字文」第一丁うらをとつてこれ
を「清書千字文」の該当箇所(第六丁うら)と対照すると

満漢千字文	閩潤	餘余	成承	歲在	律乎	呂於	調條
陽揚	雲元	騰騰	致日	雨露	結保	為違	霜雙
yang yun	teng jy	ioi lu	giyai wei	suwang			
金今	生笙	麗利	水上陸	玉裕	出俛	峴髡	岡缸
gin seng	hi sui	ioi cu	kun gang				
清書千字文	Zuwen ioi	(yodを二欠く)	ceng dzui	ioi	ioi tiyoo	yang. yun	teng jy ioi. lu giyai wei suwang.
	gin seng	hi sui. ioi cu	kun gang.				

また「百体千字文」(とびらによる。第二冊のはしらに百体千字
文とある)(版本)にふくまれた「清書千字文」をバリン園立
図書館蔵本によつてみると(この書は大英博物館にもある)、そ

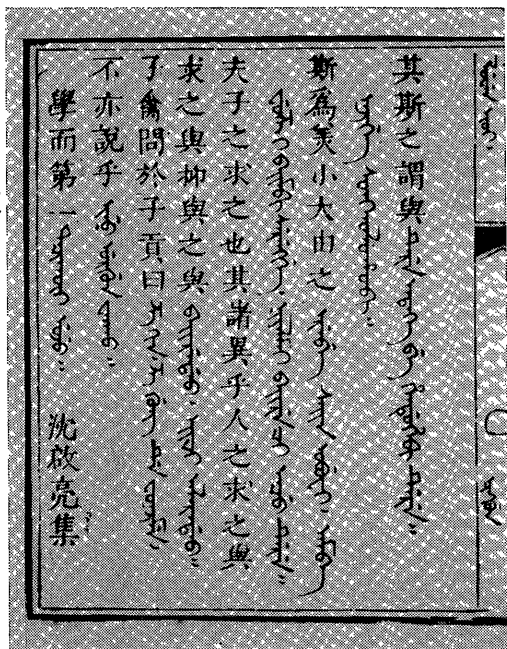
のおくがきた elhe taifn orin dunn aniya unyun biyai ice
 Inenggi bithei yamun biyan sio io jen araha とある。ついで
 それについて「清書千字文 翰林院編修尤珍書」(漢文の行の
 おいかたではこれが冒頭)と記されており、上のべた「清書千
 字文」の相当する箇所の記事とまじく一致する。

なお付言すれば「和漢三才図絵」の「歴代文字」の条に千字文
 のしまいの三字にあたるとしてあげられている満洲字は、実は冒
 頭題名の「千字文」の満洲字 ciyam dz wen である。

四書要覽 Sy šu oyonggo tuwara bithe 一冊。序二丁、

本文五五丁。パリ国立図書館蔵。とびらには、まんなかに二行、
 右に上記漢文書名、左に満文書名、その左に一行、婁東沈弘照先
 生定、書名の右に一行、崇礼堂梓とある。版刷りの題簽に同じ満
 漢書名がある。序(漢文)のおわりに「康熙二十五年十月二十一
 日婁東沈啓亮識」とある。本文はじめに「四書要覽 沈啓亮集」
 とある。本文は漢滿文の四書を摘録している。

この書のとえば第六丁うらの満洲語訳文は Inenggidari gi-
 yangnaha sy šu i jurgan be suhe bithe (沈啓亮) (康熙一六
 年の序をもつ)の満洲語訳文にくらべてみると、これとはほとんど
 一致する。以下にこの箇所を引用し、その満文日講四書解義を
 よび、康熙三〇年の序をもつ「新刻滿漢字四書」の han i araha
 manju hergen i sy šu bithei sioi (乾隆六年)をもつ御製滿
 字四書の han i araha ubaliyambuha dunn bithei gutucin
 御製縮訳四書序(乾隆一〇年)をもつ「御製縮訳四書」の訳文と



のちがいを示す。(注の番号は筆者のつけたもの)

- 為政第二 dasan be yabubure (1) jai (2).
 子孫子問孝子曰無違 meng i dz (3) hiyoosun be fonjire
 jakade kundz (4) hendume nme jurcere..
 樊遲御子告之曰無違探問孝於我我對曰無違 fan c'iy (5) sejen
 jataha de (6) kundz (7) alame meng sun (8) minde
 hiyoosun be fonjire jakade (9). bi jabume (10). (11)

ume jircere sehe.

樊遲曰何謂也 fan c'y hendume. aibe henduhebi.

不知義不知是知也 sarkū (12) be sarkū se. (13) ere uthai

sarangge (14) kai.

a (H) 埃(cik) なじ。(E1) 二つ点ある。

b (e) (E) 二つ点ある。

c (4) (7) kundz びなへ fudz ㄱㄱ。(E1) 二つ点ある。

d (1) yabubure びなへ yabuburengge ㄱㄱ。(e) jai
のあとに ayelen ㄱㄱ。(e) dz のあとに ㄱ の点がある。

(4) (7) kundz びなへ fudz ㄱㄱ。(5) c'y のあとに ㄱ の
点がある。(e) sun のあとに halangga. ㄱㄱ。(e) fon-

jite jakade びなへ fonjita de ㄱㄱ。(E) bi jabume びな
へ mini jabuhange ㄱㄱ。(E) sarkū びなへ sarkūngge
ㄱㄱ。(E) 二つ点ある。(14) sarangge びなへ sarasu ㄱㄱ。

以上の二書のほか、従来知られている沈啓亮のあらわしたものに
は、上にふれた「大清全書」とともにまた「清書指南」がある。
もつともあるらとされる満洲語の文法的記述をふくむこの「清書
指南」については、ちかへは今西春秋博士が「清書指南のことなる」
(ビンリア 七 昭和三十一年) という論文でふれていられる。な
お同氏は天理図書館蔵本によつて「清書指南」の目録の条に「卷
三 翻譯虚字講約」とあるときに「清書」とあるのは「大清全書」
をさすものであるとみられてゐる。しかし大英博物館所蔵の

批評と紹介 池上

「清書指南」 Manju bithei jy nan (巻頭書き) (版本一冊) による
で、そこには「清書」をなへ、ちがひに三字あつて「清書指南説」
とあり、したがつてこれは「大清全書」をさすものではないとみ
られる。満洲語本では第二版以後では序などのおわりがおちてな
いことがあるが、これもさうしたためのことであらうか。

問答語 Fonjin jabun leolen i bithe 一冊。大英博物館
(二部蔵)。とらへには、まんなかに二行、上記満漢文書名、その
左に一行、doro eldengge i nadaci aniya jakūn bryade fo-
lohongge、書名の右に一行、道光七年八月刊刻とある。版刷り
の題簽に同じ満漢文書名がある。第二丁以下のはしらにも同じ漢
文書名がある。満漢の単語、句をのせている。この書は比較的あ
たらしいものであるから、よそにもおそろく今後みつかる見込み
が大である。

III

つぎにブックス教授があげている種々の満洲語版本の諸版にさ
らに筆者のみた別の版をおぎなう。

BMBL 73~75 ページ 大部成語 Ninggun jurgan i tok-
toho gisun i bithe 一七四二年 鴻遠堂版。大英博物館蔵。六
巻。一帙六冊。満漢文。とびらには、上によき書きで乾隆七年重
鐫、左に上記満漢文書名、右に上記漢文書名、まんなかに京都鴻遠
堂梓行とある。はしらに満漢大部成語とある。第一冊第一丁のわ
くはたつて 20.2 cm.

なおジャイルスの目録 (H. A. Giles, A catalogue of the

Wade Collection of Chinese and Manchu books in the Library of the University of Cambridge, Cambridge, 1988) に G24 吏部成語としてのケンブリッジ大学図書館所蔵の書名なしの写本一冊は、実は六部成語である。滿漢文。

BMBL 77~78 ページ 清文典要 一七三八年 老二酉堂版。大英博物館、内閣文庫蔵。四卷。滿漢文。とびらには、上によて書きで乾隆戊午新刻、まんなかに清文典要、右に秋芳堂編輯、左に老二酉堂蔵板とある。大英博物館本は、とびらの「老二酉堂」の下の部分がきれてない。内閣文庫本によれば、四冊、清文典要序4丁十清文典要目録4丁十清文典要卷之一71丁、卷二80丁、卷三89丁、卷四88丁(ただし一葉に二つ以上の丁数をつけてあるものがかかりあり、また二葉が同じ丁数をもつものもあり、実際の丁数はこれとことなる)からなり、卷一第一丁のわくは、たつ14.5cm、たつ11.4+11.8cmである。フックス教授の一七三八年永魁齋版についての記述はこの版にもあてはまる。その点一八七八年文淵堂版(学習院図書館蔵本による)はことなる。

BMBL 80 ページおとび上記の滿文書籍聯合目録 28 ページ 滿漢成語對待 Manju nikan i fe gisun be jofoho acabuha bihe 雲林堂版。ケンブリッジ大学図書館蔵。四卷。一冊(のちにさらに製本したもの)。滿漢文。とびらには、上によて書きで新鶴滿漢必読とあり、左に fe gisun be jofoho acabuha bihe、右に成語對待、まんなかに雲林堂梓行とある。

BMBL 94 ページ 繙訳類篇 一七四九年 永魁齋版。大英博

物館、静嘉堂文庫蔵(8)。四卷。一帙四冊。滿漢文。とびらには、上によて書きで乾隆十四年八月鐫、まんなかに上記漢文書名、右に冠菊密編、左に永魁齋蔵板とある。第一冊はじめに繙訳類編序(このおわりに乾隆己巳年二月既望襄平周祖榮仁先甫梓序とある)、繙訳類編凡例、翻訳類編目録(以上すべて漢文だけ)があり、つぎに翻訳類編卷一がつづく。このはじめに「張家阿抗阿校、尼瑪察冠景編、舒穆魯有福対」とある。第二、三、四冊にはそれぞれ卷二、三、四がある。はしらには類編とある。大英博物館本の第三冊の版刷りの題簽には上記漢文書名とともに fan i lei hryan bihe という滿文書名がある。静嘉堂文庫本によればそれぞれの冊は 2+2+2+41, 46(ただし第一六、一七丁は同じ葉のため実際は 45), 39, 55丁、本文第一丁のわくは、たて 18.2cm, よこ 13.05+12.9cmである。文淵堂版(筆者蔵本による)はこれにくらべて内容的には大体かわりないようであるが、たとえば巻四の五三―五五丁の無慮の一則是、配列の順序にあやまりがある。

BMBL 95~96 ページ 音漢清文鑑 Nikan hergen i ubali-yambuha manju gisun i buleku bihe 一七三五年 六経堂版。大英博物館蔵。二〇卷。一冊(のちにさらに製本したもの)。滿漢文。とびらには、上によて書きで雍正乙卯年初刻、まんなかに二行、上記滿漢文書名、その右に董佳氏明鐸敬註、書名の左に翻刻必究、さらにその左に繙谷六経堂蔵板とある。はじめに序(このおわりに雍正十三年歲次乙卯春和董佳明鐸謹識とある)、凡例、絵目があり、そのつぎに第一巻以下の本文がつづく。本文をはじめ

に上記と同じ満漢文書名がある。

なお BMBL 38~39 ページ 新刻満漢字四書 Ice foloto manju nikan hergen i sy šu 一七三三年 鴻遠堂版に同じくは本稿注の参照。

NBMBL 10~11 ページ 満漢合璧三字経註解 Manju nikan hergen i kancime suhe san dz ging ni bithe 二巻。満漢文。⁽⁶⁾

藜照閣版。大英博物館蔵。一冊。とびらには、まんなかに二行、上記満漢文書名、その右に一行、惟徳氏陶格敬訳、書名の左に一行、京都藜照閣梓行とある。はじめに満漢合璧三字経註解序があり、そのおわりに雍正十三年歲次乙卯桂月穀旦繙訳主事馨泰序とある。つきに本文巻上がきてそのはじめに上記満漢文書名がある。巻上は第三九丁におわり、巻下は第四〇丁におわる。巻下の第一丁おもては yen di sen nung si fukjin anja 炎帝神農氏始為末におわる。

二南堂版。ケンブリッジ大学図書館蔵。一冊。とびらには、左に上記満漢文書名、右に上記漢文書名、まんなかに二行、wei de si tooh (g?) e ubaliyambuba gemun hecen i el nan tang de folome selgiyehe 惟徳氏陶格敬訳京都二南堂梓行とある。はじめに満漢合璧三字経註解序があり、そのおわりに乾隆六十年正月穀旦繙訳主事馨泰序とある。つきに本文巻上がきて巻頭に上記満漢文書名がある。

四

批評と紹介 池上

こちらに李氏の上記の満漢文書籍聯合目録をおぎなつて同書にのる満洲語版本の別の版をあげる。

22 ページ 清文補彙 Manju gisun be niyeceme isabaha bithe 一八九〇年 書業堂版。コペンハーゲン王室図書館、東洋文庫蔵。八冊。満漢文。とびらには、左に上記満漢文書名、右に上記漢文書名、まんなかに光緒庚寅年重刊 京都北書業堂発兌とある。第一冊の巻之巻の満漢文巻頭書名も上記のとおりである。東洋文庫本によれば、序、凡例 6 丁十巻卷 44 丁、卷式 50 丁、巻參 45 丁、巻肆 45 丁、巻伍 51 丁、巻陸 50 丁、巻柒 48 丁、巻捌 57 丁十跋（おわりに嘉慶歲次壬戌仲春婿法克精額謹跋とある）1 丁からなり、巻卷第一丁のわくは、たて 18.9 cm、よこ 15.1+14.8 cm である。

25 ページ 單清語 Gargata manju gisun i bithe 一八八一年 劉東山版。大英博物館（巻五だけ）、東京大学言語学研究室（巻五まで）、東洋文庫（巻四まで）だけ、なお巻二、三はそれぞれ二部あり）蔵。満漢文。とびらには、上に二段 doro eldengge i nadaci aniya jakun biya 道光七年八月とあり、まんなかに二行、上記満漢文書名、その右に二行 gulu lamun i wang cang meo šuwaselhangge 正藍王昌茂印刷、書名の左に二行 wargi hoton i hio dung san folohongge 西城劉東山刊鑄とある。題簽にも上記満漢文書名がある。各巻一冊。東京大学本によれば、それぞれの巻は 22, 24, 23, 22, 23 丁からなり、巻一第一丁のわくは、たて 20.9 cm、よこ 13+12.9 cm である。一ページ

六行二段。

これを一八九一年の荊州駐防繕訳総字版の单清語 Gargata manju gisun とくへらるると、前者の巻五のおわり(第二二、二二三)の gosin jilan i hacin 仁慈類は、後者の巻四第三十二うらから第四十一おもつてある gosin jurgan i hacin 仁義類に相当し、この「gosin 仁」ではない。両者の収録語句は記載にことなる点があり、また一方におつて一方にないものもすくなくない。たとえば巻一第二十一おもつてはじまのようである。(番号は筆者のつけたもの)

abkai hacin 天文類

- | | |
|--|--------------------------------|
| 1 abka 天 | 2 dergi abka 上天。昊天 |
| 3 abka fundehun 天肅 <small>秋色慘淡</small> | 4 ulden 晨光 <small>黎明之前</small> |
| 5 uldeke 晨光現 | 6 alin jakaraha 東方明 |
| 7 gersi fersi 黎明 | 8 gereke 天明了 |
| 9 gehun gereke 大亮了 | 10 gerhen nukiyeme 黄昏 |

これらへらるる荊州版の相当する箇所、巻一第二十一おもつてのこの字を記すに、2、3、4 は単に abka dergi 上天 abka fundehun 天肅 ulden 晨光とある。2、3、4 のあいだに niohon abka 蒼天 gengiyen abka 青天がある。5、6、7 のあいだに farhün suwallyame 黒龍驪がある。8 は gereke 天亮とある。9 はな

27ページ 清文指要・統清文指要 (すくなくとも統清文指要

は)一七八九年 雙峯閣版。大英博物館、パリ国立図書館蔵。滿漢文。大英博物館本によれば、四冊からなり、第一冊は字音指要上、清文指要中、第二冊は清文指要下、第三冊は統清文指要上、第四冊は統清文指要下である(この記載による)。第三冊のとびらには、左に sirame nikan hergen i kancibuha manju gisun i oyonggo jorin、右に兼漢統清文指要、まんなかに乾隆己酉年 雙峯閣藏板とある。表題として sirame banjibuha nikan hergen i kancibuha manju gisun i oyonggo jorin bithe 統編兼漢清文指要とある。巻頭には表題と同じ滿漢書名がある。ただし gisun のつぎに i が無い。パリ国立図書館本はもとの四冊を一冊に製本してある。この書のケンブリッジ大学図書館所蔵の一本は「統清文指要」のとびらに、左右に上記滿漢文書名、まんなかには乾隆己酉年とだけあつて以下は空白になっている。

なお「清文指要」の滿漢文写本一冊がケンブリッジ大学図書館にある(ウェイト蒐集本)。また Tanggū meyen i gisun (表題)という滿漢文写本、二巻二冊がコンスタンツェン王室図書館にあり、第一冊おわりに badaranga doro i orin ilaci anuya dūn biyai juwan uyun de ulyge. このほか Tanggū meyen の滿漢文写本とみられるものがケンブリッジ大学図書館、コンスタンツェン王室図書館にそれぞれ一冊ある。

5ページ 聖諭広訓 (2)
badarambuha bithe Enduringge tacihiyen be nelleme

聖經堂・博古堂版。ベルリン国立図書館蔵。滿漢文。一冊。と
びらには、左に上記滿漢文書名、右に上記漢文書名、まんなかに滿
漢字合璧 京都琉璃廠 西門内 聖經
漢文書名、はしらは上記漢文書名がある。序のおわり(第六丁
うら)には京都順城門外琉璃廠博古堂梓行とある。序6丁、本文
64丁(第一一丁を欠く)。本文一ページは滿漢文あわせて18行。
一八三二年版。西ドイツ図書館蔵。滿漢文。一冊。最後の第八
一丁おもひには *doro eldengge i juwan emuci aniya juwe
biyai* とある。はしらは上記滿漢文書名がある。本文一ページは滿
漢文あわせて14行。

一八三六年A版。大英博物館蔵。滿漢文。一冊(もとの二冊を
のちに製本したもの)。最後の第八一丁に *doro eldengge i ju-
wan ninguci aniya ningun biyai guwangjeo i (?)
jiyanggiyün sulfangga dasame foloto* とある。題簽に上記
滿漢文書名、はしらに上記漢文書名がある。本文一ページは滿漢
文あわせて14行。ケンブリッジ大学図書館の同書一本もこの版だ
らう。

一八三六年B版。ケンブリッジ大学図書館蔵。滿漢文。一冊。
最後の第八一丁おもひに *doro eldengge i juwan ninguci
aniya ningun biyai* とだけある。はしらに上記漢文書名があ
る。

3 ページ 御製繙訳四書 *Han i araha ubaiyambuha dui
bithe* 滿漢文。御製繙訳四書序(おとに乾隆二十年十二月十四

批評と紹介 池上

日とある)、大学章句序、大学、中庸章句序、中庸、論語序説、論
語上、論語下、孟子序説、孟子上、孟子上、孟子下からなる。すなわち朱
熹の章句、集註の序と本文である。
この書には殿版のはかにつきのようなことなるとびらをもつ版
がある。

A版 西ドイツ図書館(メレンドルフ旧蔵本)、東洋文庫蔵。
とびらには、左に上記滿漢文書名、右に上記漢文書名、まんなかに
京都琉璃廠 西堂梓とある。東洋文庫本によれば、六冊、416 +
187 + 32、9 + 52、67、8 + 108、69、66丁(第五、六冊は孟子上であ
り丁づけは二冊とおし)であり、大学章句序第一丁のわくは、た
て19 cm、よこ14 + 13.9 cmである。メレンドルフ旧蔵本は、の
ちに洋装した一冊本であり、論語上において第一三丁が重複して
第五二丁がおちている。

B版 西ドイツ図書館(メレンドルフ旧蔵本)、大英博物館(二
部)蔵。とびらには、左に上記滿漢文書名、右に上記漢文書名、ま
んなかに京都西二西堂蔵板とある。B版のメレンドルフ旧蔵本
は、のちに洋装した一冊本であり、論語序説を欠き、論語上の第
四九丁からおわりの第五二丁までが手写しであり、孟子上は第一
〇七丁まで、第一〇八丁がおちている。A版東洋文庫本にくら
べて、孟子上以外の丁数は一致する。B版の大英博物館の一本は、
論語序説もあり、論語には手写しの部分がなく、孟子上は第一〇
八丁まである。

C版 大英博物館、コペンハーゲン王室図書館蔵。とびらには、

左に上記滿漢文書名、右に上記漢文書名、まんなかに宝名堂梓行とある。大英博物館本は六冊、コペンハーゲン本は五冊。

D版 大英博物館蔵。とびらには、左に上記滿漢文書名、右に上記漢文書名、まんなかに京都瑠璃廠（東門内聖經西門内博古堂梓）とある。大英博物館本は、五冊、ただし中庸章句序、論語序説、論語上、孟子序説を欠く。

E版 ケンブリッジ大学図書館蔵。とびらには、まんなかに二行、上記滿漢文書名。その左に *doro eldengge i orin nadaci aniya* とある。書名の右に二行 *guwangieo hai seremšeme the hafasa* (以上第一行、以下第三行) *gingguleme dahame song-kolome folobuha* とある。なお論語序説のおわりに *doro el-dengge i juwan nadaci aniya juwe biyai* とある。ケンブリッジ本は、のちに洋装した一冊本である。

これらの版はとびら以外でもたとえばつぎの箇所のことなり、たとえ入れ本があつたにせよすべてが同じ版ではないことが知られる。論語下の滿文の巻頭標題は BCE版では *leolen gisuren bihe, fejerji* とあるが、その *fejerji* が D版では *fejerki* とあり、A版では *fejerhi* とある。またC版において御製繙訳四書序のあとの年月日の滿文中 *biyai* とあるが、AB版ではその *y* が *w* のような字形となつてゐる。D版ではその年月日が漢文だけで滿文がない(しかも序文にすゞつづけて記されている)。さらにE版では論語序説のあとに上記年月日があり、ABC版ではこれがない。さらにこれら同じ版でもことなる箇所がある。

五

つぎに左の書についてその諸版をあげる。なおヨーロッパでは筆者がみられなかつた版も加えてあげる。

清文啓蒙 *Cing wen ki meng bihe* (とびらによる) 滿漢文。四卷。おわりに雍正庚戌孟春之朔日作忠堂主人程明遠題とある序がはじめにあり、つぎに滿漢字清文啓蒙総目がきて、本文第一卷となる。巻頭書名は滿漢字清文啓蒙 *Manju nikan her-gen (i) cing wen ki meng bihe* とあり、そのあとに「長白舞格 寿平 著述。錢塘 程明遠 佩和 校梓。」とある。はしりに清文啓蒙とある。

第1類

1 一七三二年 一西堂版。内閣文庫(高橋景保書き入れ本)蔵。とびらには、上によと書きで雍正壬子□(刻力)、左に上記滿漢文書名、右に上記漢文書名、まんなかに、

滿漢三國志 滿漢書經 清文啓蒙

四書

合璧 西廂 滿漢菜根談 清文鑑 以上書籍俱京都二西堂

滿漢四書

清漢考試題 清文對待

とある。四冊。各卷一冊。31.2×57.60, 60, 60丁。序第二丁のわくは、たて 21.4 cm, よこ 13.9+13.9 cm.

2 三槐堂版。大英博物館、西ドイツ図書館、東洋文庫蔵。

とびらには、左に上記滿漢文書名、右に上記漢文書名、まんなかに三槐堂梓行とある。四冊。各卷一冊。ただし大英博物館本はのち

に一冊に製本してある。東洋文庫本によればそれぞれの冊は 3+2+57.56, 60, 60丁、本文第一丁のわくは、たゞ 20.95 cm, 4+14.55+14.5 cm である。この版はかなり流布しているようであらう。

3 文宝堂版。筆者蔵。とびらには、左に上記満文書名、右に上記漢文書名、まんなかに文宝堂梓行とある。四冊。各巻一冊。3+9+57.60, 61, 60丁。本文第一丁のわくは、たゞ 21.7 cm, 4+14.9+14.7 cm。ただし筆者蔵本は巻一の「切韻清字」の *niowe* と *kuwang* のあいだの箇所をふくむ葉や巻三の第五九丁以下の葉など若干の葉が別の版のものでおぎなっている。

第二類

1 永魁齋・宏文閣版。大英博物館、学習院図書館蔵。とびらには、左に上記満文書名、右に上記漢文書名、まんなかに *yung kui jai dzang ban* 宏文閣蔵板とある。四冊。各巻一冊。学習院本によればそれぞれの冊は 57, 60, 61, 60丁、本文第一丁のわくは、たゞ 19.75 cm, 4+13.35+13 cm とある。

2 永魁齋・文盛堂版。内閣文庫蔵。とびらには、左に上記満文書名、右に上記漢文書名、まんなかに *yung kui jai dzang ban* 京都文盛堂蔵板とある。四冊。各巻一冊。57, 57, 58, 60丁。本文第一丁のわくは、たゞ 19.9 cm, 4+13.2+13.2 cm。

第一、II類のちがいは、序を満洲語で前者では *siot i gisun* と記し、後者ではあたらしい文語で *stutucin* と記し、本文はごめの上記満文書名のなかの *hergen* のあとに *i* が前者にはある

が後者にはない。また「切韻清字」の条で後者は前者にくらべて *niowe* と *kuwang* のあいだの部分ごとんでいてない。さらに後者では前者とごとなり「滿漢十二字頭單字聯字指南」の条で十二字頭の各字にあてた漢字が「御製增訂清文鑑」の十二字頭に用いられたと同じ漢字となつている。第二類は系譜的には第一類よりあとのものであることはあきらかである。なおつぎのようなとびらをもつ版があるが、そのどの類にはいるかみなかつた。

1 永魁齋・二酉堂版。コペンハーゲン王室図書館蔵。とびらには、左に上記満文書名、右に上記漢文書名、まんなかに *yung kui jai dzang ban* 二酉堂蔵板とある。版刷りの題簽に書名のほかに *yuan ban* 原板とある。四冊。

2 中和堂版。ヘルリン自由大学東アジア研究室蔵。とびらには、左に上記満文書名、右に上記漢文書名、まんなかに京都中和堂書坊蔵板とある。四冊。

このほかに上にあげた清文啓蒙の巻之二兼漢滿洲套話だけからなるつぎの類がある。

第三類

1 滿漢字清文啓蒙 *Manju nikan hergen i cing wen ki meng bithe* (巻頭書名) ケンブリッジ大学図書館蔵。とびらなし。巻頭の書名のつぎに「図明阿 祥林 得奎全校対」とある。はしらに「清文啓蒙 兼漢滿洲套話 品經堂承刻」とある。一冊。

2 兼漢漢語滿洲套話清文啓蒙 (*Giyan man han ioi man jao tao huwa cing wen ki meng*) *Manju nikan gisun*

kancicha manjurara fyelen cing wen ki meng bithe
(金瓶梅本) 東洋文庫藏。題簽には Manju nikan gisun kancicha
 manjurara fyelen i gisun cing wen ki meng bithe 兼滿
 漢字滿洲套語清文啓蒙とある。とむらなし。なしに書名の記載
 なし。滿漢の本文には各漢字の音をあらわす滿洲字がなほ多く
 記されている。本文のおわりに は abkai wehiyehé i sahūn
 meihe aniya niyengniyeri ujui biyade (一七六一年) とあ
 る。四冊、八〇丁 (丁数は四冊ともしてつけてある)。第一丁の
 わくは、たゞ 22.45 cm, 47 13.1+12.7 cm.

3 清文啓蒙 Ajige juse be neileme tacibure manju
 bithe (ていひごよめ) 東洋文庫 (第一、二巻のみ) なる第一巻
 は二部あり、東京大学言語学研究所蔵。とむらには、上に二段、
 doró eldengge i nadaci aniya jakūn biya 道光七年八月と
 あり、まんなかに二行、上記滿漢文書名、その左に二行、wargi
 hoton i lio dung san folohongge 西城劉東山刊鐫、書名の
 右に二行 gulu lamun i wang cang meo šuwaselahangge
 正藍王昌茂印刷とある。題簽にも上記滿漢文書名がある。なしに
 啓蒙とある。東京大学本によれば、四巻、四冊、各巻一冊、21,
 20, 23, 16丁あり、第一丁のわくは、たゞ 20.5 cm, 47 12.6+13.1
 cm とある。

六

時憲書については以下に記すものがあつた。いずれも版本。それ
 ぞれ一冊。滿文。

1 Daicing gurun i elhe taifin i gūsin nadaci aniya
 suwayan tasha forgon i yargiy(an to)n () の部分に
 不明のため判読できないもの。(康熙三十七年)

2 Daicing gurun i doró eldengge i orin sunjaici aniya
 niohon meihe erin forgon i ton i bithe (道光二十五年)
 ともに大英博物館蔵

3 Daicing gurun i yooningga dasan i juwan emuci
 aniya sahaliyan bonio erin forgon i ton i bithe (同治
 十一年) 大英博物館蔵

4 Daicing gurun i badaranga doró i duci aniya
 suwayan tasha erin forgon i ton i bithe (光緒四年)
 大英博物館蔵

5 Daicing gurun i gehungge yoso i juweci aniya
 sanyan indahūn erin forgon i ton i bithe (宣統二年)
 西ドイツ図書館蔵

以上いずれも巻頭書名とある。このものははじめの葉が失われ
 ている。

6 Fulgiyan indahūn aniyai yaya goloi ton i sukdun
 i erin (以下不明瞭) (はつめふの葉 [はつめふ目十三とある])
 のはつめふの記載) 丙戌年

7 Sahahūn gūlmahūn aniyai geren monggo ba hoise
 i aiman i šun tucire dosire inenggi dobori i erin kemu
 (はつめふから八番目の葉 [はつめふ目十二とある]) のはつめふの記

載)癸卯年

ほか、

o Daicing gurun i badarangga doru i jai aniya nadan dasan i hetu undu yabure dulefun i erin forgon i ton i bithe (題簽による) (光緒二年)

ヘルリン自由大学蔵

なおパリ国立図書館のものはみてない。

このうち5はすでに上記の満文書籍聯合目録にあげてある。また6と5は東洋文庫にもある。7は東洋文庫蔵の Daicing gurun i badarangga doru i orin uyuci aniya sahanūn gūmahūn erin forgon i ton i bithe (巻頭書) (光緒十九年癸卯)とは一致せず、道光三年癸卯か、あるいは1870年にふるいものである。P. G. von Möllendorff, Essay on Manchu literature (JNCBRAS, XXIV, 1890) p. 37には乾隆四八年癸卯のものがあげてある。なお東洋文庫には1870年度の満文時憲書(巻頭書各 Daicing gurun i [年号年次干支] erin forgon i ton i bithe) (各年度一冊)がある。

道光元、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三年、同治一、一、二四年、光緒二、三、七、九、一〇、一一、一四、一五、一六(5部)、一七(3部)、一八(4部)、一九(2部)、二〇(2部)、二一(2部)、二二(3部)、二三(3部)、二四、二五、二六(3部)、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四年、宣統元、二、

批評と紹介 池上

三、四年。(13)

なおさらに月食に関する記述二点が大英博物館にある。

1 雍正一〇年五月一六日の月食に関するもの。はじめに「欽遵御製曆象考成推算得雍正十年五月十六日壬申望月食分秒時刻并起復方位」とある。盛京奉天府その他の地の月食の時間などを記す。図あり。版刻。一冊。滿漢文。

2 はじめの部分はやぶれてない。おわりに「治理歴法南懷(あとむし)」とあり、これは南懷仁(F. Verbiest)であろう。山東濟南府その他の地の月食の時間などを記す。図あり。版刻の表。滿漢文。同博物館のこれをまいて入れたはこに英文で一六七一年三月二五日の月食のものも記してある。

七

パリ国立図書館や大英博物館などには滿洲語本のほかにヨーロッパ人の滿洲語に関する著作の稿本が保存されている。インクのいろもすれたそれらの稿本にかつて十八世紀から十九世紀にかけてさかんであつた滿洲語研究をうかがうことができる。たとえば、

Verzeichniss der Chinesischen und Mandshuischen Bücher und Handschriften in der Bibliothek der Kaiserlichen Academie der Wissenschaften, verfasst auf Befehl Sr. Excellenz des Herrn Grafen Alexis von Rasumowski, 1810, im August. (アヴラシキヤ) 一冊。パリ国立図書館蔵。これがクラブプロート(J. Klapproth)のペテルスブルク

学士院所蔵本の目録である。

Манджурская грамматика въ пользу российскаго юношества
сочиненная Антономъ Владкнкимъ 1804 года (このころに)
一冊。ドイツ語訳の書きこみがある。パリ国立図書館蔵。

Vocabularium Sincico-Mantschuiico-Ruthenum, juxta
ordinem rerum. compositum ab Alexei Leonief. anno
1773. — Cum interpretatione Germanica clarissimi Ger-
hardi Mertens, consiliiarii aulici in Collegio medico Ir-
kutskae in Sibiria orientali. 1782. (このころに)
一冊。大英博物館蔵。

このほかにもたとえば仏文滿洲語文法(一冊。VIII+96+附
録。みかえしのはりがみによれば *Elementa Linguae Tartaricae*
のフランス語訳)、ラテン・シナ・滿洲語辞典(三冊)、滿
洲語訳を付した玉堂字彙(一冊)。ロシア語・フランス語による書
きこみもある)(以上いずれもパリ国立図書館蔵)などがある。

八

滿洲語とともにトド字による蒙古語オイラト文語の記載がある
文献には、たとえば西域同文志、あるいは李德啓やグレベンシ
チコーフの文献目録にみられるもののほかにまたつぎのものがあ
る。

伊型類編(題簽と帙の書名による)写本。一帙四冊。大英博物
館蔵。部門別の辞書。滿洲語、シナ語のほかにトド字による蒙古
語オイラト文語の語も記入されている。ことなる筆蹟の蒙古字に

よる蒙古語の記入もある。

九

しまいに女真語の資料についてふれると、華夷訳語女真訳語の
基礎的研究である石田幹之助博士の「女真語研究の新資料」(桑
原博士還暦記念東洋史論叢 東京 昭和六年)に、シャイルズの
上記目録の G284 の記載にもとづいてケンブリッジ大学図書館所
蔵のいわゆる「訳字」という書が女真語の資料の一つとしてあげ
られている。しかしこれには実際には女真訳語はふくまれていな
い。すなわち、

写本。一冊(のちに洋装したもの)。ケンブリッジ大学図書館
蔵。華夷訳語の一本。蘇祿訳字、高昌館訳書、西天訳字、西番訳
語、暹羅訳字、緬甸訳書をふくみ(それぞれの言語の文字が記さ
れているが来文はない)、西番訳語と暹羅訳字のあいだに一ペー
シ、一七九八年のつぎの論語がある。(このおわりに朱印が三つ
ある。)

礼部訳字書十種蓋明相伝日本四訳館所行

用官籍今惟暹羅緬甸百訳蘇祿八百兩掌六

帙可備稽考百訳即斐夷八百八媳婦國也若

回回西番高昌西天則久入版図会編

同文之治至精而易曉此不足擬矣知聖道齋
嘉慶三年戊午秋日

シャイルズの目録の記載は高昌館訳書のウイグル字を滿洲字と
あやまつたものであろう。

つぎの書は、旧プロシヤ国立図書館所蔵のものであり、グルー
ヰ (W. Grube) の *Die Sprache und Schrift der Jüden*
(Leipzig, 1896) の原本となつたものである。

写本。六冊(のちに洋装したもの)。ティュービンゲン大学図
書館蔵。華夷訳語の一本。⁽¹⁵⁾

この書の女真訳語とてらしてみると、グルーベ本のテキストは
重大なあやまりをふくんでいないことがあきらかとなる。ただし
漢字について原本と一致しないつぎのような箇所がある。(番号
はグルーベ本でつけられている番号)

原本 グルーベ本

630	563	294	278
雪	畧	児	職
		子	官
雲	緞		
		グルーベ本一〇三ページには	<i>lies im</i>
			<i>Glossar stueh statt yun. とある。</i>

667 以 一
しかし厳密にみると女真字についてはその原本の字形や筆法をた
だしくつたえているかどうか問題のあるところはすくなくない。
この点については別の機会にゆずりたい。

本稿は昭和三十七年六月二日の日本語学会第四十六回大会における公開講演の原稿
を増補したものである。

注

(1) ヨーロッパの満洲語文献を閲覧できたことについては、

批評と紹介 池上

種々援助くださった *Societas Uralo-Altaica* ならびに
A. von Gabain, O. Pritsak 両教授、いろいろ御指示いた
だいた W. Fuchs 教授、また図書館の便宜をはかつてくだ
りつたハンブルグ国立兼大学附属図書館の H. Braun 博士、
ドイツ国立図書館の G. Auster 博士、ティュービンゲン大学
図書館の W. Virneisel, H. Hornung 両博士、ベルリン自由
大学の H. Eckardt 教授、西ドイツ図書館の W. Seuberlich
博士、H. Helmers 氏、大英博物館の E. D. Grinstead 氏、
ケンブリッジ大学図書館の M. Scott 氏にここに深く感謝
の意を表したい。

(2) メレンドルフ旧蔵本のうち戦争中ヘルリンから東方へ疎
開したその約三分の二はいまは行方不明の由であつた。

(3) なお 4, 5, 7 には W. Fuchs 教授、6 には W. Simon
教授、8 には Willy Baruch の作成したそれぞれの図書館
の満洲語文献の目録の稿本または解題の原稿がそなえてあつ
た。しかしなかには発表をひかえる未定稿もあり、また筆者
もくわしく書きとめてないので引用しないが、以下にのべる
ことのうち、それらの記載にてらしたときふれてないこと、
一致しないことだけがここにあらしく報告できることであ
る。

(4) 内藤虎次郎 東洋文化史研究(昭和十一年)三六三—
六四ページ。新村出 東方言語史叢考(昭和二年)四八、七
五、一〇六ページ。

(5) 「清書千字文」について、およびこれと「百体千文」の関係についてはなおフックス教授の上掲三つめの論文の二ページ参照。

(6) a b c d はいずれも版本。ここには a b c ともに東洋文庫蔵本による。d はとびらのない筆者蔵本（後述の点では同書C版と一致する）による。

「新刻滿漢字四書」はパリ国立図書館に三部（いずれも玉樹堂本）あり、コペンハーゲン王室図書館にはこの書の「孟子下」の零本一冊がある。東洋文庫本はつぎのようである。

とびらには右に刻滿漢字四書、左に *ice folo ho manju ni kan hergen i sy su* とあり、まんなかに雍正十一年新鑄京都鴻遠堂梓とある。滿漢文。六冊。墨序一丁十紅序一丁十序二丁十大学十丁十中庸十丁、上論三九丁（第三九丁は手写し）、下論四九丁（第四九丁は手写し）、上孟九丁、下孟第一丁↓第四八丁、下孟第四九丁↓第九六丁（ただし第八七丁が重複し、97丁あり）。はじめの二つの序のあとには「鴻遠堂梓行」とみえており、三番目の序は上段滿文、下段漢文、ともに一ページ八行、おわりに「康熙歲次辛未仲秋吉日題」とある。本文も上段滿文、下段漢文、ただしともに一ページ一〇行。「大学」第一丁のわくは、たて 22 cm, よう 14.1+14.4 cm。

(7) 天理図書館「滿文書籍集」（昭和三〇年）九、一〇ページ参照。

(8) 天理図書館「滿文書籍集」二二ページによれば、同図書

館にも乾隆一四年永魁齋本がある。

(9) なお滿蒙合璧三字經註解 (Manju monggo hergen i kamcime suhe san dz ging ni bithe, Manju mongguli usug iyer xaburun taylysan san dzi king ün bitig) に一八三二年五雲堂版がある（オクスフォード大学ボドリアン図書館蔵）。滿蒙漢文。とびらには、滿蒙漢文の書名の左に道光十二年新鑄、右に板廠琉璃廠五雲堂とある。はじめに滿蒙合璧三字經註解序があり、そのおわりに雍正十三年歲次乙卯八月穀旦とある。つぎにもう一つの序があり、そのおわりに道光歲次壬辰孟秋穀旦崧巖富俊撰とある。これに本文卷上がつぎ滿蒙漢文の卷頭書名がある。上下一卷。一帙四冊。天理図書館「滿文書籍集」一〇ページによれば、同図書館にも道光一二年五雲堂本がある。

(10) 東洋文庫蔵本による。滿漢文。とびらには、まんなかに二行、上記滿漢文書名があり、その左に光緒辛卯季夏新鑄、書名の右に板存荊州駐防繕訳繪字とある。題簽にも上記滿漢文書名があり、はしらには上記漢文書名がある。滿漢文の卷頭書名も上記のとおりである。卷八おわりに「補録單字清語」の条がある。八卷。一帙八冊。各卷一冊。32, 30, 32, 33, 32, 34, 33, 33丁。卷一第一丁のわくは、たて 16.3 cm, よう 11.4+11.6 cm。一ページ八行二段。

(11) つぎの版がその目録5ページにのるものであろうか。

一八九〇年聚珍堂版。コペンハーゲン王室図書館蔵。滿漢

文。一冊。とびらには、左に上記滿文書名、右に上記漢文書名、まんなかに二行、*ging du lung fu sy dung keo nei lu nan gioi jen tang dz hing 京都隆福寺東口内隆南聚珍堂梓行*とある。とびらのうらに *badaranga doru i juwan ningguci aniya jorgon biyade dasame folombi* 光緒十六年十二月重刊とある。はしらに上記漢文書名とともに聚珍堂とある。本文一ページは滿漢文あわせて14行。天理圖書館「滿文書籍集」三ページによれば、同図書館にも光緒十六年聚珍堂本がある。

(12) 第I類の三種の版本は、たとえはつぎの箇所のことなる。異施清字の条は *haminambi* の語に対して、*ε* では「咳嚙那嚙」とあるが、*1* では「那」でなく「郭」とある。これはあくまで誤字であろう。また同じ条で *ε* が *dagilambi* の語をあげているのに対して、*1*、*2* は *dakilambi* とつづる。

(13) 東洋文庫の *Daicing gurun i badaranga doru i juwan ningguci aniya šanyan tasha erin forgon i ton i bihe* (光緒十六年) の五部のうちおくがきのない四部のもの表紙にすみがきで二部には「光緒五年」、一部には「光緒十二年」とあるのは上記巻頭書名と一致しない。

(14) 蒙古托成集およびおそろくまた一学三貫(なきてあげた滿文書籍聯合目録の二九、二五ページ所載)

清文総編鑑(托成文字総編鑑) (A. B. Печениковъ,

批評と紹介 池上

Краткий очеркъ оьдраговъ маньчжурской литературы,
Владивостокъ, 1909, стр. 23.)

(15) F. Hirth, The Chinese Oriental college (JNCB
RAS, XXII, 1887, pp.203~223) 参照。

附記 ケンブリッジ大学図書館蔵の華夷訳語の識語については、筆者のあと問もなくやはり同書を閲覧された山田信夫氏の原文の写しを参照させていただいたことを同氏に感謝する。この本についてのくわしいことは同氏の発表を期待する。また筆者のその後の問い合わせについて回答して下さった大英博物館の E. D. Grinstead 氏、パリ国立図書館の M. R. Guignard 氏に感謝する。